

3-1 出土弥生土器の時期的変遷

熊本県北部、菊池川流域には弥生時代後期の集落遺跡が多数存在し、そのいくつかは発掘調査されている。狭小な調査面積、行政の調査体制が不足した時期を経て、山鹿市津袋遺跡では弥生時代後期土器の時期区分がなされ（高木 1979）、方保田東原遺跡では層位学的検討が加えられ（中村 1982）、菊池川流域の弥生時代後期土器編年を中九州、佐賀地域の範囲に位置づけた研究（木崎 1996）も編まれている。

築地館跡では 24 棟の堅穴住居跡が発掘され、多量の土器が出土した。土器は、壺、台付甕、高坏、鉢等の組成をとり、形式学的に複数の土器群に分けることが可能である。これらの住居跡出土土器群を既存の編年観に基づき検討した結果、連続した 4 つの段階を析出し、木崎編年（木崎 1996）の野部田Ⅰ式から野部田Ⅱb 式の時期に比定した。

3-1-1 形式学的検討

まず、築地館跡から出土した弥生土器を、形式学的特長から複数の土器群に分類する。分類に際しては、遺構、すなわち住居跡を単位とした。住居跡出土遺物の一括性、並びに住居跡と出土遺物との同時性については議論があるように、必ずしも出土遺物の同時性が担保されているわけではない。しかし、ここでは各型式の共伴関係とその変遷を追うことを第一義とし、かつ、出土遺物の多寡による較差を抑制するためにも、住居跡を単位とした分析方法を採ることとした。

築地館跡から出土した弥生土器は、以下のとおり 4 つの土器群に分類された。

土器群 1

SI38 出土資料に代表され、SI04、SI32 出土資料を含む土器群である。

甕には、台付甕脚台部の断面形態が底部付近で厚く裾部に向けて漸移的に薄くなるものが組成する。壺には、口縁部がラッパ状に開き、平坦面を備える口唇部に刻目を施す壺が組成する。高坏には、皿状の坏部から口縁がほぼ鉛直にたちあがり口唇部が外折するもの、及び坏部が浅い碗形を呈するものが組成する。また、裾部に刺突孔を施す高坏がある。鉢には、胴部から口縁部にかけて広がる鉄鉢形を呈するもの、及び口縁径が胴部径より小さいものが組成する。この他、ジョッキ形土器が組成する。

土器群 2

SI01、SI10 出土資料に代表され、SI02、SI07、SI21、SI36 出土資料を含む土器群である。

甕には、台付甕脚台部の断面形態が底部付近では厚いが裾部にかけては均一化するものが加わる。壺には、口縁部がラッパ状に開き頸部に突帯または刻目突帯を

巡らせるもの、肩部に櫛描波状紋を施すものが組成する。鉢には、胴部から口縁部にかけて広がる鉄鉢形を呈するものに加え、胴部が鉄鉢形を呈し口縁部が鐙形に折れるものが組成する。この他、小型手捏ね土器が組成する。

土器群 3

SI13、SI17 出土資料に代表され、SI05、SI06、SI08、SI09、SI12、SI14、SI23、SI19、SI22、SI29 出土資料を含む土器群である。

甕には、口縁端部に平坦面を備えるもの、頸部に突帯を巡らせるもの、脚台部断面形態の器壁の厚みが均一化したものが組成する。甕及び器台には、タタキを最終調整とするものが加わる。器台は、胴部中位より上にくびれ部をもつものとなり、口縁部直下にくびれ部をもつものが加わる。壺には、頸部と肩部の間に連続刺突紋を施すものが加わり、頸部の突帯は素紋化する。高坏には、裾部に孔を有するものが組成する。この他、脚付鉢、ミニチュア土器が組成する。

土器群 4

SI20 出土資料に代表され、SI33 出土資料を含む土器群である。

甕及び器台は、タタキを最終調整とするものとなる。壺及び甕は、口縁端部に鉛直方向の平坦面もつものとなる。高坏には、脚部にミガキが施すものが加わる。器台は、口縁部直下にくびれ部をもつものとなる。さらに、全形式の器壁が薄くなる傾向をとる。

3-1-2 層位学的検討

次に、上記の土器群が出土した住居跡の切合関係から、各土器群の新旧関係を把握したい。関係住居跡の切合関係は以下のとおりであり、（古）土器群 1 → 土器群 2 及び土器群 3 → 土器群 4（新）の関係を導くこ

とができる。

土器群 1 と土器群 2

SI32（土器群 1）を SI21（土器群 2）が切る。

土器群 1 と土器群 3

SI38（土器群 1）を SI17（土器群 3）が切る。

SI32（土器群 1）を SI22（土器群 3）が切る。

土器群 2 と土器群 4

SI21（土器群 2）を SI20（土器群 4）が切る。

土器群 3 と土器群 4

SI23（土器群 3）を SI20（土器群 4）が切る。

なお、切合関係が確認できない土器群 2 及び土器群 3 の差異は、土器群 3 においてタタキを最終調整とする甕及び器台、並びに、裾部に孔を有する高坏が組成することである。既往の土器編年は、甕のタタキ痕の残存、高坏裾部の孔の両者を新しい様相と捉えている。したがって、既往の土器編年観により、（古）土器群 2→土器群 3（新）の関係を導くことができる。

以上から、土器群は（古）土器群 1→土器群 2→土器群 3→土器群 4（新）と変遷することが確認できた。

さて、上述の各土器群は、住居跡を単位としており、その埋没過程、他遺構との切合形成過程に時期が介在していることは言うまでもない。すなわち、土器群 1～4 の変遷には時期差による差異が伴っている。ついては、築地館跡における弥生時代後期の土器群 1～4 の変遷を、以後、1 段階～4 段階の変遷と記述することとする。

3-1-3 時期の比定

最後に、築地館跡における弥生時代後期の 1 段階～4 段階を、既往編年（木崎 1996）と対照し、その时期的検討を行った結果、次表のとおり結論した。なお、比較に用いた形式学的特徴は、各土器群の特徴として、既述している。

さて、木崎編年は菊池川中流域の資料を中心として検討した編年（案）である。この木崎編年と菊池川下流域の築地館跡出土土器とを比較した結果、その異同を次のとおり認めた。なお、菊池川中流域と下流域に共通する現象については、白川・緑川流域の二子塚遺

表 2 築地館跡における時期変遷

築地館跡	木崎編年（木崎 1996）
1 段階	野部田Ⅰ式
2 段階	野部田Ⅱ a 式
3 段階	野部田Ⅱ b 式
4 段階	野部田Ⅱ b 式

跡の成果（島津・村上 1992）と比較し、その異同を記述している。

菊池川中流域と下流域に共通する現象は、第一に、台付甕の脚部が長脚化しないことである。白川流域では時期に従い漸次、長脚化が進行し、最終段階（二子塚Ⅶ段階）には著しい長脚化が生じることと対照的である。第二に、高坏は細筒型の脚部にラップ状に開く裾部をとり、新段階（野部田Ⅱ b 式）には裾部に孔を有することである。白川流域では太筒型の脚部が用いられ、古段階（二子塚Ⅱ段階）には坏部と脚部の接点に突帯が加わるので、両流域の高坏は、形態、変遷が異なることとなる。第三に、器台が組成することである。白川流域では、器台を組成する土器様式は確認されていない。

菊池川中流域と下流域とで異なる現象は、下流域ではジョッキ形土器が古段階（築地館跡 1 段階）のみの組成であることに対し、中流域では全期間（野部田Ⅰ式～野部田Ⅱ b 式）組成することである。このことは資料的制約を受けている可能性が高く、類例の蓄積をまち再検討することが必要である。

（引用文献）

高木正文 1979「鹿本地方の弥生後期土器」『古文化談叢』6

中村幸史郎 1982「方保田東原遺跡出土の土器の編年（案）」『方保田東原遺跡』山鹿市立博物館調査報告書 2、山鹿市教育委員会

木崎康弘 1996「弥生時代後期土器群の編年学的研究」『蒲生・上の原遺跡』熊本県文化財調査報告 158 熊本県教育委員会

島津義昭・村上恭通 1992『二子塚』熊本県文化財調査報告 117、熊本県教育委員会

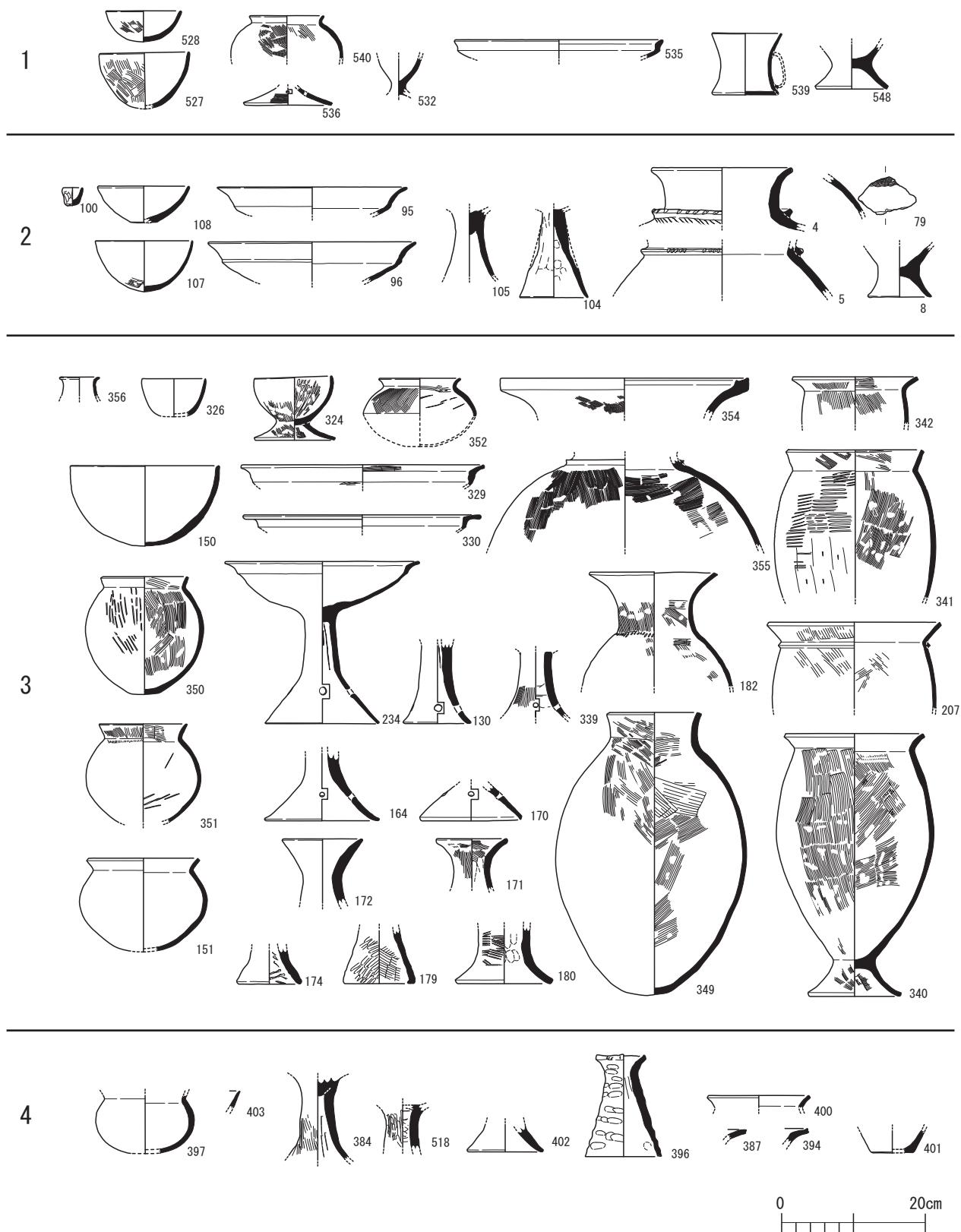


図 159 出土弥生土器の編年